

朴「革新的インフルエンザウイルス創薬」プロジェクト
中間評価報告書

日時：平成28年1月20日（水） 9:30～11:30

場所：KSP 東棟201 KAST 講義室

委員： 神田 裕 （協和発酵キリン株式会社東京リサーチパーク長）
嶋田 一夫 （東京大学大学院薬学系研究科教授/研究科長・学部長）
中井 謙太 （東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター教授）
西島 和三 （持田製薬株式会社医療開発本部課長、東北大学客員教授）

報告者：朴「革新的インフルエンザウイルス創薬」プロジェクト
プロジェクトリーダー 朴 三用

平成28年1月20日、標記研究プロジェクトの中間評価に関する研究課題評価委員会を開催した。同委員会は、朴プロジェクトリーダーから成果報告及び自己評価報告を受けた後に質疑を行い、その後、委員による審議を行った。

総評は次のとおりである。

良いターゲットで豊富な研究成果に基づいて適切に進行している。製薬企業との共同研究によってより現実性の高い創薬の道筋ができていく。残された2年間で研究テーマの選択と集中という観点で最終的なミッションの達成に向けて、知財をとると同時に論文発表について戦略的に進めることが大事である。

また、創薬の研究は国民の健康・安心につながるものでは工学的なテーマと違って息が長い。その点を踏まえて、今後の展開を考えていただきたい。

審議の内容を以下に記す。

1. 研究成果について

・有望な創薬ターゲットを見つけて、医薬品候補化合物の探索に向けて着実に進んでいると思われる。また、製薬企業と密接な共同研究を行っているということは実用化に向けて良い研究体制をとっているといえる。したがって、知財の確保及び人への投与に係る副作用について、共同研究先と良く議論すべきである。KASTとしても知財の確保と副作用情報を製薬企業に伝えることは必要と考える。

・製薬会社との関係で、論文発表が制限されることはやむを得ないとしても、件数が少ない。今後は、知的財産を確保しつつ、論文としても成果を公表する努力が望まれる。

・これまでは幅広く研究を展開してきたが、今後の実用化を意識した出口戦略を考えると、ロードマップを立てて、ある程度の絞り込みをして残りの2年間を行うことが必要である。

2. 今後の展開について

- ・新規インフルエンザの治療薬は国民の要望が高く、かつ市場は大きい。したがって、本プロジェクトにより新規医薬品候補化合物が見つければ、社会的貢献が高い成果となり、企業の観点からも重要な成果となる。
- ・最先端研究で何をやってほしいかと国民に問うと、6割の回答が創薬・医療関連である。したがって、当該研究テーマを KAST が実施しているということは、公的資金により運営される KAST の設立目的に合致している。さらに当該プロジェクトで行っている構造解析に基づく創薬研究は、民間企業が行うにはややリスクが高いものであり、この観点からも公的機関が行う意味は高い。
- ・工学的研究領域とは異なり、創薬の場合、4年間研究を行い、後の2年間で成果が出るものではなく、最低でも10年、15年はかかることが統計的に明らかになっており、継続することが望まれる。
- ・当該プロジェクトは、製薬企業と良好な協同研究体制をとっており、研究期間終了後の成果によっては、製薬企業がマッチングファンドを出して、共同研究を継続する可能性が高い。
- ・したがって、上記を踏まえ、委員会の評価としては、当該プロジェクトは、次の実用化実証研究に発展する可能性がある結論づける。

平成28年1月20日

委員長 嶋田 一夫

